

# 高大接続改革の現状と卒業研究指導教員への 卒業時の学生評価アンケート調査について

山路浩夫, 湯山加奈子, 三宅貴也, 中村裕樹, 和田光司

The current status of the Integrated Reforms in High School and University Education and University Entrance Examination in Japan and the recent research survey on the UEC students by their laboratory supervisors.

Hiroo Yamaji, Kanako Yuyama, Takaya Miyake, Hiroki Nakamura, Koji Wada

## 要旨

2021 年度大学入学者選抜より、高大接続改革のもとでの新たな入学者選抜が導入される。本学においても、入学者選抜の改善やこれを支える調査研究が進められてきた。本稿では、近年、アドミッションセンターが取組んできた調査分析のうち、各研究室教員の協力を得て実施した学生評価アンケート調査について報告する。学業成績のみでは測りきれない幅広い能力を調査対象とし、高大接続改革に向けた重要な追跡調査として位置づけてきたものである。本研究では、直近の調査結果に基づき、本学の学生の特性や課題を示すとともに、本学の入学者選抜が多様な学生確保に機能してきた状況を明らかにした。

キーワード：高大接続改革、大学入学者選抜、追跡調査、アンケート調査、問題解決力

## Abstract

With respect to the Integrated Reforms in High School and University Education and University Entrance Examination aimed at realizing a High School and University Articulation System, new enrollment selection system will be introduced from the 2021 university entrance examinations. The University of Electro-Communications (UEC) has been implementing enhancement of selection systems of prospective students and follow-up surveys. In this paper, we report on the research survey on the UEC students by their laboratory supervisors. In this study, we focused on the analysis of the survey in connection with the admission system, analyzed the characteristics and capabilities of our students, and indicated that the entrance examination system of our university has worked properly to obtain diversified human resources.

Key words : Integrated Reforms in High School and University Education and University Entrance Examination, research on the UEC students by their laboratory supervisors, follow-up studies, providing proper solution for various issues

## 1. はじめに

2021年度入学者選抜より、大学入試センター試験に代わって大学入学共通テストが導入され、各大学の個別試験も、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜等の新たな区分で実施される。2014年12月の中央教育審議会による高大接続「答申」等を踏まえて進められてきた、高大接続改革のもとでの新たな入学者選抜である。[1][2]

高大接続改革は、新たな時代を生き抜く力を育成するため、高校教育、大学教育、大学入学者選抜（入試）の一体的改革を目指すものである。社会の変革が進む中で、「問題を発見し、答えを生み出し、新たな価値を創造」する力の育成が重視される。入学者選抜は、高校と大学の教育を接続する要として、「学力の3要素」を踏まえた多面的・総合的な評価が求められる。[1][3]

電気通信大学（以下、本学）は、従来より、教育、入学者選抜の改善取組みを重ねてきた。2016年度改組では、学士課程を3つの類および14の教育プログラムからなる体制へと再編し、入学者が、段階的・探求的に専門性を高めるための体制を整備するとともに、これに対応して入学者選抜制度も見直しを実施した。

この間、アドミッションセンターにおいても、本学が有する様々なリソースやデータを活用し、入学者選抜の改善に資するための調査研究を進めてきた。特に、近年は、入試結果（試験成績）や学業成績（GPA）等に基づく調査に加えて、入学後の進路選択と関連づけた分析、調査書等の入試資料の活用検討、GPA等の学業成績のみでは測りきれない能力・資質の把握等にも取り組んできた。

それら取組みの中に、各研究室教員の協力を得て実施する学士（学域）4年次学生評価アンケート調査がある。この調査は、研究に向かう姿勢、学術成績、問題解決力、コミュニケーション力等、幅広い能力を対象としており、2016年度改組前より実施してきた。近年は、調査項目の充実も図り、高大接続改革に向けた重要な追跡調査として位置づけてきた。入学後の学修成果や、学業成績（GPA）のみでは測りきれない能力・資質の状況を丁寧に把握し、入学者選抜の改善を進めることがますます重要となる中で、取組みを進めてきたものである。

以上を踏まえ、本稿では、2021年度からの新たな入学者選抜導入を機に、2020年に実施した学生評価アンケート調査の結果について分析・報告を行う。

## 2. 高大接続改革の現状

高大接続改革は、「学力の3要素」を育み、大学入学者選抜ではこれを踏まえた多面的・総合的な評価を行うことを求める。「学力の3要素」は、1.「知識・技能」、2.「思

考力・判断力・表現力」、3.「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」（以下、主体性等）である。高校までの教育を通じてこれらを育成し、大学教育で更に伸ばすこと、そのために大学入学者選抜を見直すこと、これが改革の主たる目的である。[1][3]

大学入学共通テストでは、「思考力・判断力・表現力」の評価を重視した作問、資料・データをもとにした考察、社会生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面設定等、学習プロセスも意識した改善が図られている。

各大学の個別選抜では、学校推薦型選抜や総合型選抜の拡充、「主体性等」の評価推進、調査書の活用等、改革の趣旨を踏まえた取組みが続けられている。

また、高校生を対象に、大学での学びを体験し、理解を深めるための高大連携教育の機会も広がっており、高校と大学をつなぐシームレスな教育や、進路選択におけるマッチングを重視した取組みが続けられている。

一方で、高校生・受験生に大きな影響を及ぼす制度変更の課題や懸念点も数多く指摘され、教育現場の不安を払拭して制度改革を行うことの難しさが現実のものとなった。2021年度入学者選抜より実施が目指されてきた、大学入学共通テストにおける記述式問題（国語、数学）の導入、英語4技能評価のための英語民間試験の活用が、いずれも見送りとなった。[4][5]

また、「主体性等」の多面的評価についても、具体的な内容や評価手法についてコンセンサスを得ることが容易でなく、現状では各大学任せの部分が少ない。

こうした中で、結果として、各大学の個別選抜への注目が高まる。新型コロナウイルス感染症対策に万全を期した選抜実施が大きな課題となる現状では制約も大きいものの、本来、時間をかけた丁寧なプロセスを通じて評価すべき学力、特に、主体性や表現力等の評価は、各大学の個別選抜に委ねるべきとの指摘も少なくない。

文部科学省は、2019年12月「大学入試のあり方に関する検討会議」を設置し、大学入学共通テストにおける記述式問題の導入、英語民間試験の活用を中心に、経緯の検証と併せて検討が続けられることとなった。同会議では、大学入試や高校教育の実情、関係者の意見等を十分に把握するため、高校生を含めた高校関係者、各大学への実態調査も実施されている。[6][7]

また、2020年2月には、文部科学省により「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」が設置され、「主体性等」をはじめとする評価の内容や手法について、総合的な検討が行われることとなった。新学習指導要領に対応した最初の入試となる2025年度入試に向けて、調査書のあり方や電子化等の関連課題を検討することが中心的な課題である。[8][9]

2025年度入試（2024年実施）は、2021年度入試に続く、次の節目となる。新学習指導要領に対応した出題科目や

範囲の見直しが予定されており、これに対応した制度設計も重要課題となる。

### 3. 近年における本学の取組み

前述の通り、近年、本学も、教育、入学者選抜の改善を重ねてきた。2016年度改組では、教育体制を再編し、入学者選抜制度の見直しを実施した。これを反映し、アドミッション・ポリシー（AP）、ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）の「三つの方針」の一体的整備も実施した。[10]

この間、模擬講義や研究室見学等を通じた高校教育の支援、高校と大学をシームレスにつなぐ高大接続教育の取組みも積極的に進められた。

入学者選抜に関しては、入学者選抜方法改革ワーキンググループ（WG）や入試委員会等において主要課題の検討が進められた。同WGでは、対応の基本方針となる提言「高大接続改革への対応と本学入学者選抜方法の見直し」（2018年4月）がとりまとめられた。

2021年度入試からの、本学の新たな入学者選抜制度（除、特別編入学等）の入試区分、募集人員をTable 1に示す。

Table 1. 本学の入学者選抜制度の概要

2020年度入試（2019年度実施）		2021年度入試（2020年度実施）	
入試区分	募集人員	入試区分	募集人員
一般入試		一般選抜	
前期日程	370	前期日程	349
後期日程	250	後期日程	250
推薦入試	70	学校推薦型選抜	70
—	—	総合型選抜	21
昼間計	690	昼間計	690
先端工学基礎課程		先端工学基礎課程	
A0入試 （夜間主課程）	30	総合型選抜 （夜間主課程）	30
総合計	720	総合計	720

一般選抜、学校推薦型選抜に加えて、新たに総合型選抜を導入することとした。一般選抜では、大学入学共通テストや本学が実施する個別学力検査に、また、学校推薦型選抜においては、出身高校からの推薦、総合問題試験、面接試験、提出書類に重点が置かれる。これに対して、総合型選抜（昼間）では、「主体的に課題と向き合い、大学での探求・学修を深めていくことのできる人材を求め」とし、プレゼンテーション、面接試験、活動実績報告書をはじめとする提出書類に重点が置かれる。

また、一般選抜（前期日程、後期日程）においても、調査書を活用した「主体性等」の評価を導入することが決まった。

一方、入学者選抜の改善を支えるため、前述の通り、本学が有する様々なリソースやデータを活用して、追跡調査の充実も図られてきた。

先行研究においても、幅広いデータを用いた追跡調査や「主体性等」評価に関する検証の必要性が指摘され、試みられてはいるものの、知見の蓄積は十分ではない。また、分析指標として、学業成績（GPA等）に注目が集まりがちであることも否めない。[11][12][13]

以下、本稿では、2021年度からの新たな入学者選抜導入を控えて、2020年に実施した学生評価アンケート調査の結果について、直近の調査結果と分析の概要を報告し、本学の学生の特性や課題を明らかにする。

## 4. 卒業研究指導教員への学生評価アンケート調査

### 4-1. 学生評価アンケート調査

アドミッションセンターでは、近年、学生が配属されている研究室の指導教員に対して、学生を評価するアンケート調査を実施している。全学の教員および所属する各専攻事務室の幅広い協力を得て、年1回実施している。対象は、学士（学域）4年次に加えて、修士（博士前期課程）を修了する学生についても調査を行なっている。本稿では、高大接続との関連性から、学士4年次の学生の調査結果について取り上げる。

### 4-2. 学生評価アンケート調査の実施概要

本稿で報告する2020年の調査は、2020年3月期に卒業を迎えた学生（2016年度学域入学者）を対象とする。調査の概要は、次の通りである。

学生評価アンケート調査は、後述する設問内容と回答方法を記したアンケート用紙を、所属する各専攻事務室を通じて配付・回収していただく形で実施した。

実施時期は、例年、3月下旬から4月の時期であるが、2020年については、新型コロナウイルス感染症の影響による登学制限等の事情により、登学制限が緩和されるまでの2ヶ月程度、回答期限を延期して実施した。

各指導教員にアンケート調査の趣旨を理解していただくため、事前に、研究科長、各専攻長等を通じて関係者への協力依頼も実施した。

調査内容は後述の7項目とし、それぞれ5段階での評価を依頼した。情報管理に万全を期し、アンケートの回答結果は統計的に処理し、特定の個人が識別されない形で追跡調査に用いている。

### 4-3. 調査内容と回答方法（評価尺度）

調査の内容と評価尺度を、各々Table 2、Table 3に示す。回答方法は、各項目の設問に対して、同意するかどうかの程度に応じて5段階での評価を依頼した。



Table 2. 教員による学生評価アンケート設問項目

No	設問項目	設問内容
[1]	真面目さ	学業に取り組む姿勢は好ましいか
[2]	学術成績	学術的に優秀であるか
[3]	社会性	学業以外の活動への取り組みは好ましいか
[4]	研究面でのコミュニケーション力	周囲の学生、教員、共同研究関係者等との関わりは好ましいか
[5]	主体性・問題解決力	新たな課題や不測の事態に対して、主体的に解決・克服する能力が高いか
[6]	期待性	将来は社会に出て有為な存在になると、期待させるものがあるか
[7]	総合力	総合的に評価して優秀な人材であるか

Table 3. 教員による学生評価アンケートの評価尺度

評価尺度	強く不同意	不同意	どちらでもない	同意	強く同意
評点	1	2	3	4	5

過年度との比較のため、調査項目の継続性を保つとともに、学内で検討・整備が進められている「卒業コンピテンス」の6要素（知識獲得力、創造力、課題探究・対応力、自己実現力・組織的行動力、多様性・協創力、コミュニケーション力）との関連等も念頭に置いている。

調査項目[5]の「主体性・問題解決力」は、高大接続改革のもとでの本調査の意義の高まりを見通して、2017年の調査より新たに追加したものである。

## 5. 学生評価アンケート調査の結果

### 5-1. 調査結果の概要

今回の2020年の調査においては、学内262名の教員に対して依頼を行い、197名から回答を得た（回答率75.2%）。対象とする学生数としては402名分の回答結果を得た。対象者は、2016年度改組初年度の学域入学者である。設問項目ごとの評価結果をTable 4に示す。

各項目ともに、5（最も肯定的な評価）、もしくは4（5に次ぐ肯定的評価）の評価を受けた学生数が最も多い。

4以上の評価が全体に占める割合は、「真面目さ」で83.8%、「研究面でのコミュニケーション力」で82.0%、「総合力」で80.0%、「期待性」で78.6%などとなっている。評価の平均値では、6つの項目で4.0を上回る。卒業研究を終え、本学での学修の最終段階に達した者として、総じて高い評価を受けている。平均値では、いずれの項目も前年度を少しづつ上回っている。

特に、「真面目さ」は被評価者の50%が評価5を得ている。真面目さで定評のある本学の学生の資質が、卒業研究・学術取組みの中で、しっかりと発揮されている。

そうした中で、「主体性・問題解決力」については、評価の平均値が3.9と相対的に低く、4以上の評価が全体に占める割合は67.4%と、7項目のうちで最も低い。

Table 4. 回答結果の概要（回答を得た対象者数 計402名）

項目 評価	真面目さ		学術成績	
	5	201	50.0%	132
4	136	33.8%	168	41.8%
3	45	11.2%	83	20.6%
2	18	4.5%	17	4.2%
1	2	0.5%	2	0.5%
計	402	100.0%	402	100.0%
評価の平均値 (カッコ内は前年度)	4.3 (4.1)		4.0 (3.9)	

項目 評価	社会性		研究面での コミュニケーション力	
	5	139	34.8%	167
4	150	37.6%	162	40.4%
3	106	26.6%	64	16.0%
2	3	0.8%	4	1.0%
1	1	0.3%	4	1.0%
計	399	100.0%	401	100.0%
評価の平均値 (カッコ内は前年度)	4.1 (3.9)		4.2 (4.1)	

\*3名分未回答

\*1名分未回答

項目 評価	主体性・ 問題解決力		期待性	
	5	123	30.6%	171
4	148	36.8%	145	36.1%
3	105	26.1%	76	18.9%
2	22	5.5%	10	2.5%
1	4	1.0%	0	0.0%
計	402	100.0%	402	100.0%
評価の平均値 (カッコ内は前年度)	3.9 (3.7)		4.2 (4.0)	

項目 評価	総合力	
	5	161
4	161	40.0%
3	67	16.7%
2	13	3.2%
1	0	0.0%
計	402	100.0%
評価の平均値 (カッコ内は前年度)	4.2 (4.1)	

「主体性・問題解決力」の評価が低い傾向は、前年の調査でも同様であり、本学の学域生の課題と考えられる。

尤もこうした傾向は、本学のみにとどまらず、わが国の教育全般に通ずる課題である。高校教育においても、知識・技能の習得に重点を置いた教育が長年課題視され、課題発見・解決能力や論理的思考力等の強化が求められてきた。高大接続改革で改めて問われている。[3][14]

今回の調査を通じて、高大接続改革の課題が本学の課題でもあることを確認することができた。

7つの項目のうち、各項目における評価相互の相関係数をTable 5に示す。「主体性・問題解決力」と「総合力」、「学術成績」と「総合力」、「真面目さ」と「総合力」、「主体性・問題解決力」と「期待性」などで、より強い相関が認められる。総合力に優れ、あるいは将来の活躍が期待される人材であるためには、真面目で学術成績に

優れることに加えて、新たな課題や不測の事態に対して、主体的に解決・克服する能力に優れていることが望まれることを示唆するものと考えられる。

なお、学業成績（3年次末GPA）との相関が認められるのは、学業成績である（相関係数 $r=0.48$ ）。

Table 5. 各設問項目の評価（得点）間の相関係数

	真面目さ	学業成績	社会性	研究面でのコミュニケーション力	主体性・問題解決力	期待性	総合力
真面目さ	1.00	0.74	0.56	0.64	0.69	0.76	0.78
学業成績	0.74	1.00	0.55	0.48	0.75	0.76	0.82
社会性	0.56	0.55	1.00	0.58	0.55	0.58	0.64
研究面でのコミュニケーション力	0.64	0.48	0.58	1.00	0.55	0.66	0.65
主体性・問題解決力	0.69	0.75	0.55	0.55	1.00	0.77	0.81
期待性	0.76	0.76	0.58	0.66	0.77	1.00	0.88
総合力	0.78	0.82	0.64	0.65	0.81	0.88	1.00

### 5-2. 入試区分別の比較分析

次に、調査結果を、入試区分別に比較検討する。得られた評価データを入試区分別に整理すると、その内訳は、一般入試前期日程（以下、前期）221名、一般入試後期

日程（以下、後期）138名、推薦入試（以下、推薦）36名、海外からの留学生7名である。（対象学生が入試を経験した当時の呼称に従い、一般入試、推薦入試とする。）

高大接続の視点との関連から、以下では、前期、後期、推薦の合計395名について比較分析を行う。入試区分別にみた、各項目の評価結果の平均値と標準偏差を、それぞれFigure 1、Figure 2に示す。

入試区分別にみた場合にも、前節で全体の傾向をみた場合と同様に、前期、後期、推薦いずれの入試区分においても、「真面目さ」の評価が最も高く、「主体性・問題解決力」の評価が最も低い。「主体性・問題解決力」は、いずれの入試区分においても、7項目の中で、標準偏差が最も大きい。

入試区分間の評価を比較すると、推薦入学者の評価が、各項目にわたって、前期、後期の入学者の評価を上回り、一般入試においては、後期が前期を上回る傾向にある。

各項目における評価得点の平均値の差の検定結果は、Table 6の通りである。「真面目さ」と「期待性」において、推薦入学者と前期入学者との間で、平均値に有意な差が認められた（有意水準5%）。また、「学業成績」において、後期入学者と前期入学者との間で有意な差がみられた（同5%）。

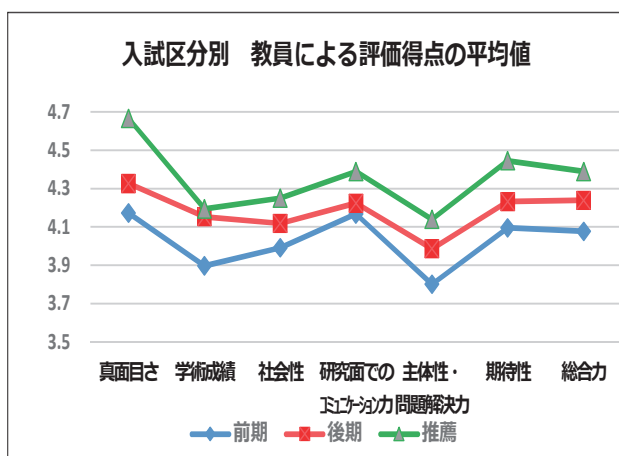


Figure 1. 指導教員による評価得点の平均値

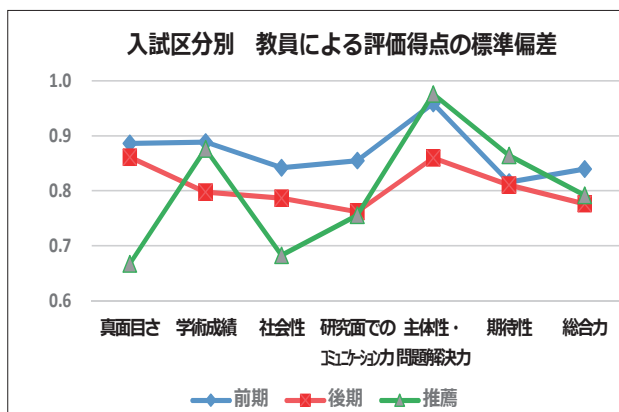


Figure 2. 指導教員による評価得点の標準偏差

Table 6. 入試区分間における各項目の評価得点(平均値)の比較(差の検定)

対象項目と比較する入試区分	評価得点の平均値の差 (入試区分① - 入試区分②)		p 値	
	入試区分①	入試区分②		
真面目さ	推薦	前期	0.49	0.004
	推薦	後期	0.34	0.089
	後期	前期	0.15	0.227
学業成績	推薦	前期	0.30	0.131
	推薦	後期	0.04	0.963
	後期	前期	0.26	0.017
社会性	推薦	前期	0.26	0.180
	推薦	後期	0.13	0.660
	後期	前期	0.13	0.327
研究面でのコミュニケーション力	推薦	前期	0.22	0.291
	推薦	後期	0.17	0.501
	後期	前期	0.05	0.844
主体性・問題解決力	推薦	前期	0.34	0.109
	推薦	後期	0.15	0.653
	後期	前期	0.18	0.162
期待性	推薦	前期	0.35	0.048
	推薦	後期	0.21	0.351
	後期	前期	0.14	0.275
総合力	推薦	前期	0.31	0.086
	推薦	後期	0.15	0.590
	後期	前期	0.16	0.161

入試区分別の傾向は、前年度の調査結果においても概ね同様である。2019年に実施した調査によると、いずれの入試区分においても、「真面目さ」もしくは「研究面でのコミュニケーション力」の評価が最も高く（3つの入試区分ともに両項目の評価はほぼ拮抗）、他方で「主体性・問題解決力」の評価が最も低い。推薦入学者の評価が、各項目にわたって、前期、後期の入学者の評価を上回る。ただし、前期と後期の評価は、どの項目もほぼ拮抗しており、学業成績で後期がわずかに上回るものの、それ以外は、前期の方がやや上回るかほぼ同水準である。

学業成績（平均GPA）でみた場合、特に入学後早期の段階において、推薦入学者の平均的な水準が、前期、後期よりも芳しくないとの指摘がしばしばなされ、アドミッションセンターの調査においても、この点は否定できない。入学試験の受験時期が一般入試よりも早く、合格発表後、入学までの期間が長いこと、その間の学習量等も影響していると考えられる。

しかしながら、当該アンケート調査からは、各調査項目において、推薦入学者の評価が、一般入試（前期、後期）入学者の評価を上回る結果となった。高校からの推薦による志願者に共通する強い特性である真面目さの点では、Figure 1に示される通り、特に推薦入学者の評価が高い。

学業成績（平均GPA）のみでは測りきれない、しかし、大学での学修や社会での活躍の基礎をなす幅広い能力や資質において、推薦入学者が、前期、後期入学者を凌ぐ評価を得ていることが認められる。即ち、推薦入試によって、学力重視の一般入試とは異なった特性・強みをもつ学生を入学させていることがわかる。

試験内容・方法を異にする複数の入試区分からなる、本学の入学者選抜制度が、これまでも、多様な人材、多様な能力・資質をもつ入学者を選抜する機能を一定程度果たしてきたと考えられる。

## 6. 主体性・問題解決力に関する分析と考察

### 6-1. 入試時のデータ（入試得点、調査書）との関連性

前章での総括的な分析を通じて、「主体性・問題解決力」の評価値が相対的に低く、本学の学生の課題であることがわかった。

新たな課題や不測の事態に対して、主体的に解決・克服していく能力は、オリジナリティが求められる学術研究はもとより、高大接続改革の要請にも見られる通り、新たな社会への転換が急速に進む今日の時代を生き抜くためにも重要な能力・資質である。

以下では、「主体性・問題解決力」について、更に他の指標との関係性も調べながら、考察を行う。

まず、入試結果（入学試験時の学力試験の成績）との

関連を検討した。大学入試センター試験、本学個別試験の両方を受験することが求められる一般入試による入学者について、前期、後期の入試区分別に、「主体性・問題解決力」の評価段階（評価5～1）ごとに、被評価者を5つのグループに分けて、入試総得点及び大学入試センター試験の合計点について、それぞれの平均値の差を比較した。これらについて平均値の差の検定（有意水準5%）を行なったところ、いずれにおいても有意な差はみられなかった。

次に、大学入試センター試験を課されない推薦入学者について、高接接続改革においても注目度の高まっている提出書類、特に、調査書の記載内容に着目し、調査書における「主体性・問題解決力」に関連する記載事項の有無と、評価結果との関連性について検討を行なった。

対象者のうち、「主体性・問題解決力」の評価が4以上であった30名について調査書を確認したところ、約77%に相当する23名の調査書において、問題解決力もしくは問題解決に取り組む姿勢が強みとして言及されていることがわかった。一方で、「主体性・問題解決力」の評価が3以下の6名については、半数以下の2名しか調査書において該当する能力の記載がみられなかった。

高等学校時代の主体的な問題解決に関する基礎能力が、大学入学以降のより高いレベルでの問題解決力の基礎をなしている可能性がうかがわれ、高大接続の中で、継続的・連続的に能力育成していくことが望まれる。

### 6-2. 入学後の学業成績（平均GPA）との関連性

次に、同様に、「主体性・問題解決力」の評価段階に応じて被評価者を5つのグループに分け、学業成績（平均GPA）の平均値を比較した。その結果、1年次末と3年次末の、いずれの学業成績（平均GPA）についても、評価5の学生グループと他の評価段階の学生グループの間で、平均値に有意な差が認められた（有意水準5%）。学業成績（GPA）が相対的に高い学生は、「主体性・問題解決力」に優れる傾向がうかがわれる。検定結果をTable 7、Table 8に示す。

Table 7. 「主体性・問題解決力」の評価段階別の1年次末GPA比較（差の検定）

比較するグループ		平均GPAの差 (評価5のグループのGPA － その他のグループのGPA)	p値
評価 5	評価 4	0.18	0.034
評価 5	評価 3	0.27	< .001
評価 5	評価 2	0.46	0.001



Table 8. 「主体性・問題解決力」の評価段階別の3年次末GPA比較（差の検定）

比較するグループ		平均GPAの差 (評価5のグループのGPA － その他のグループのGPA)	p値
評価 5	評価 4	0.19	0.003
評価 5	評価 3	0.32	< .001
評価 5	評価 2	0.46	< .001

### 6-3. 在学時の活躍（目黒会表彰）との関連性

在学時の活躍との関連性について、目黒会表彰についても検討する。目黒会表彰とは、各年度の卒業生・修了生の内、成績優秀な者として、学内選考委員会による選考、学長による推薦を経た学生に対して、同窓会である目黒会が表彰を行っているものである。

表彰を受けた学生のうち、今回の調査で指導教員から回答を得られたのは18名分、そのうち、「主体性・問題解決力」の評価は、12名が評価5、5名が評価4となっている。受賞者の中では「主体性・問題解決力」で4以上評価を得た学生は94.4%にのぼり、対象者全体での割合67.4%（Table 4）を大きく上回っている。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、2021年度入試で節目を迎える高大接続改革の現状と本学の取組みについて整理した上で、2020年度に本学で実施した、研究室の指導教員による学生評価アンケート調査の結果について、分析・考察を行った。

全体としては、総じて高い評価を得た学生が多く、特に、「真面目さ」は被評価者の50%が評価5を得ていることがわかった。

一方、「主体性・問題解決力」は、評価の平均値が最も低く、本学の学域生の課題であることが判明した。この点は、本学にとどまらず、わが国の中等・高等教育全体に通ずる問題であり、高大接続改革の課題が本学の課題でもあることを確認することができた。

入試区分別の分析では、推薦入学者の評価が、各項目にわたって、一般入試による入学者の評価を上回った。学業成績（平均GPA）とは異なる、しかし、大学での学修や社会での活躍の基礎をなす幅広い能力や資質において、推薦入学者は、前期、後期の入学者を凌ぐ評価を得ている。推薦入試によって、学力重視の一般入試とは異なる特性・強みをもつ学生を入学させていることがわかる。

「主体性・問題解決力」に焦点を当てた分析からは、大学入学以前に培った、問題解決に向かう姿勢や能力が、大学でのより高いレベルでの問題解決力の基礎をなしている可能性が示唆された。この点に関する調査書活用の

可能性については、引き続き詳細な検討が必要である。

以上を通じて、試験内容・評価方法を異にする複数の入試区分からなる、本学の入学者選抜制度が、多様な能力・資質をもつ、多様な入学者を選抜する機能を、一定程度果たしてきたことがうかがえる。

また、当該アンケートのような調査を通じて、学業成績（GPA）のみでは測りきれない幅広い能力・資質に着目した追跡調査が可能となり、入学者選抜の改善に活用できる可能性がうかがえる。

以上の分析と考察を踏まえ、今後の課題としては、主として以下の諸点を挙げるができる。

- 1) 当該学生評価アンケートについて、これまでの調査との継続性に留意しつつ、質問内容等の改善を検討し、学業成績（GPA）では測りきれない能力・適性に係る追跡調査のリソース・データとして更に充実させる。
- 2) 2021年度より新たに導入される総合型選抜の結果分析や入学者の追跡調査を継続的に実施し、選抜制度の多様化や、多面的・総合的評価の進捗について丁寧に検証する。
- 3) 問題解決力やこれを支える思考力等について、本学が学外機関と連携して実施している思考力テストのデータを併用して分析を充実させる。大学卒業時のみならず、在学中の成長過程にも更に焦点を当てて、入学者選抜との関連性を分析する。
- 4) 以上も踏まえつつ、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜、それぞれにより、多面的・総合的評価を推進していく上での、望ましい役割分担（差別化）を明らかにする。

以上の課題への取組みを通じて、当該アンケート調査も含めて、幅広い能力・適性についての追跡調査を可能にするリソース・データを更に充実させ、本学入学者選抜の改善と高大接続改革への対応を進めたい。

### 謝辞

学生評価アンケート調査の実施にあたり、研究室指導教員の先生方、研究科長、各専攻長、各専攻事務室のご担当者、前アドミッションセンター長、前副センター長、関係部局の皆様にご多大なご協力を賜りました。特に2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により登学制限が長引く中にもかかわらず、多数のご回答をいただきました。深く感謝し、御礼申し上げます。

## 参考文献

- [1] 中央教育審議会：「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ, 未来に花開かせるために～(答申)」, 2014年
- [2] 文部科学省：「令和3年度大学入学者選抜実施要項」, 2文科高等第281号, 2020年
- [3] 高大接続システム改革会議：「最終報告」, 2016年
- [4] 全国高等学校長協会：「大学入試に活用する英語4技能検定に対する高校側の不安解消に向けて(要望)」2019年
- [5] 荒井克弘：「高大接続改革・再考」『名古屋高等教育研究』, Vol.18, pp.5-21., 2018年
- [6] 文部科学省：「大学入試のあり方に関する検討会議について(令和元年12月～)」, 2019年
- [7] 文部科学省：「大学入試のあり方に関する検討会議議事録・配付資料」, 2020年
- [8] 文部科学省：「『大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議』の設置について」, 2020年
- [9] 文部科学省：「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議 議事録・配付資料」, 2020年
- [10] 中央教育審議会大学分科会大学教育部会：「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー), 『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」, 2016年
- [11] 西郡大, 福井寿雄, 園田泰正：「一般入試における主体性等評価の導入とその結果－特色加点制度に対する高校教員の不安と受容－」『大学入試研究ジャーナル』, Vol.30, pp.1-7., 2020年
- [12] 宮本友弘：「第1章『主体性』評価の課題と展望－心理学と東北大学AO入試からの示唆」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学入試における「主体性」の評価－その理念と現実－』東北大学出版会, pp.7-29., 2019年
- [13] 倉元直樹：「第4章 大学入学者選抜における評価尺度の多元化と選抜資料としての調査書」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学入試における「主体性」の評価－その理念と現実－』東北大学出版会, pp.75-104., 2019年
- [14] 文部科学省：「(高等学校編) 今, 求められる力を高める総合的な学習の時間の展開－総合的な学習の時間を核とした課題発見・解決能力, 論理的思考力, コミュニケーション能力等向上に関する指導資料」, 2013年